

指導資料

 鹿児島県総合教育センター

特別支援教育 第174号

—幼稚園，小学校，中学校，特別支援学校対象—
平成26年4月発行

発語の少ない幼児児童生徒への拡大代替 コミュニケーションの指導

コミュニケーションは、意思や感情などの情報を言葉や身振り、表情などの手段を用いて相互に伝え合うことであり、人との関わりにおいて大切なものである。

発語の少ない幼児児童生徒との関わりの中で、幼児児童生徒が一生懸命に何かを伝えようとしているが、何を伝えたいのか十分に理解することが難しい場合がある。また、幼児児童生徒が自分の思いをうまく伝えることができずに、途中で諦めてしまうこともある。相手の思いを理解したい気持ちや、相手に伝えたい思いがあるにもかかわらず、方法が分からないために、うまくコミュニケーションが成立していない状況である。

そこで、本稿では、発語の少ない幼児児童生徒がより主体的にコミュニケーションを図ることができるようにするための拡大代替コミュニケーション（AAC：Augmentative and Alternative Communication）の指導について述べる。

1 拡大代替コミュニケーションの意義

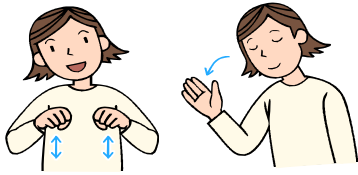
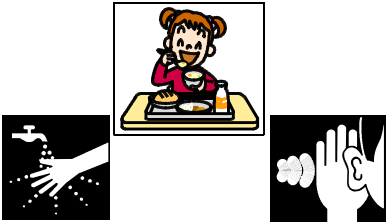
拡大代替コミュニケーションは、「¹⁾機能を補助し代替する手段として位置付けられ

ており、視線、指差し、サイン（身振り・手話）、シンボル（絵記号）、写真、話し言葉、文字、コミュニケーションエイドなど、いろいろな手段を用いてコミュニケーションを豊かにすること」であり、その目的は、「²⁾障害のある人々が、現在もつ全ての能力を活用して、個々のコミュニケーション能力を最大限に発揮させること」にある。

言葉は、コミュニケーションを図るときの大変便利な手段であると同時に高次な手段でもある。しかし、障害のある幼児児童生徒の中には、発語機能や認知、対人関係などの課題から、発語がスムーズにできずに言葉が有効な手段となり得ないことがある。発語が少ない幼児児童生徒にとって、拡大代替コミュニケーションの考え方に基づき、様々な手段を使って自分の気持ちを伝えたり、意思を決定したりすることができるようになることは、表現する喜びを味わい、主体的にコミュニケーションを図ることにつながると考える。

発語の少ない幼児児童生徒に対して、活用できる拡大代替コミュニケーションについては次のようなものがある（表1）。

表1 拡大代替コミュニケーションの例

<p>＜サイン・手話 など＞</p> <p>発語は難しいが、身体模倣ができる場合に活用する。</p> <p>機器などがなくても、身体でサインを示すことによって自分の意思や気持ちなどを伝えることができる。</p> 	<p>＜絵カード・シンボル＞</p> <p>発語や文字の読み書きは難しいが、絵やシンボルなどの視覚的な情報を理解することができる場合に活用できる。</p> <p>シンボルを提示することによって自分の意思や気持ちなどを伝えることができる。</p> 	<p>＜文字盤＞</p> <p>発語や文字を書くことは難しいが、文字を読むことができる場合に活用できる。</p> <p>50音表を配列した文字盤の文字を指で示したり、視線を向けたりして自分の意思や気持ちなどを伝えることができる。</p> <table border="1" data-bbox="1061 560 1353 712"> <tr><td>わ</td><td>ら</td><td>や</td><td>ま</td><td>は</td><td>な</td><td>た</td><td>さ</td><td>か</td><td>あ</td></tr> <tr><td>を</td><td>り</td><td>ゆ</td><td>み</td><td>ひ</td><td>に</td><td>ち</td><td>し</td><td>き</td><td>い</td></tr> <tr><td>ん</td><td>る</td><td>よ</td><td>む</td><td>ふ</td><td>ぬ</td><td>つ</td><td>す</td><td>く</td><td>う</td></tr> <tr><td>？</td><td>れ</td><td>め</td><td>へ</td><td>ね</td><td>て</td><td>せ</td><td>け</td><td>え</td><td></td></tr> <tr><td>る</td><td>。</td><td>も</td><td>ほ</td><td>の</td><td>と</td><td>そ</td><td>こ</td><td>お</td><td></td></tr> </table>	わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ	を	り	ゆ	み	ひ	に	ち	し	き	い	ん	る	よ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う	？	れ	め	へ	ね	て	せ	け	え		る	。	も	ほ	の	と	そ	こ	お	
わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ																																											
を	り	ゆ	み	ひ	に	ち	し	き	い																																											
ん	る	よ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う																																											
？	れ	め	へ	ね	て	せ	け	え																																												
る	。	も	ほ	の	と	そ	こ	お																																												

＜VOCA：Voice Output Communication Aids の略で「ヴォカ」と読む。＞

音声を出力することのできるコミュニケーションのための補助機器で、発語が難しい場合に活用できる。音声が出るため、周囲の人に伝わりやすい。

○ 録音・再生／単数キータイプ

あらかじめ録音しておいた音声を単数のキーを押すことによって出力することができる。一つのメッセージを録音して再生するものや、メッセージが順番に再生されるものがある。



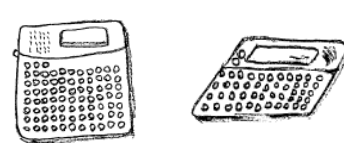
○ 録音・再生／複数キータイプ

あらかじめ録音しておいた音声を複数のキーを押すことによって出力することができる。複数のメッセージを録音し、キーの絵に応じた内容を再生することができるものがある。



○ 文字入力・合成音声再生タイプ

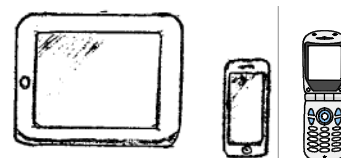
文字を入力すると音声に変換して再生することができる。その場で思ったことなどを入力することができる。文章で入力することができる。



＜携帯用情報端末＞

発語が難しかったり、言葉でのコミュニケーションは苦手だったりするが、情報機器に興味・関心があり、機器の操作ができる場合に活用できる。

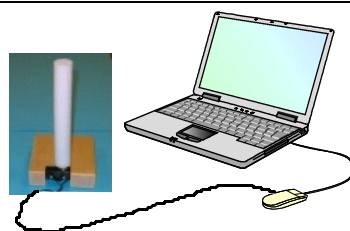
携帯用コンピュータやスマートフォン等に、タッチパネルで文字入力するアプリケーションをインストールして文章を作成したり、いろいろなシンボルをインストールしたりして、それを提示することによって、自分の意思や気持ちなどを伝えることができる。



＜自己選択を支える周辺機器＞

肢体不自由などで運動機能の制限がある場合に、様々な機器についで操作する入力装置である。

押す、引く、触れるなどの活用できる力を生かして操作可能なスイッチを使って、物事を選択したり、決定したりして自分の意思や気持ちを伝えることができる。



(指導資料特別支援教育第147号「主体的な活動を促す自立活動の進め方ーアシスティブ・テクノロジーの活用を通してー」を参照)

2 拡大代替コミュニケーションを活用する際の留意点

拡大代替コミュニケーションはあくまでも手段である。それらを使って幼児児童生徒が主体的にコミュニケーションをとることが目的であることから、活用する際は以下のような点に留意する必要がある。

- (1) 実態把握を丁寧に行い、どのような場面で、どのような手段を使うのかななどを十分に検討しながら指導する。
- (2) 使い方だけを指導するのではなく、幼児児童生徒の伝えたい内容や自己選択したことを大切にしながら信頼関係を深めて、関わる楽しさを味わわせたり、伝わったことを知らせたりして、関わる意欲を育てる指導を併せて行う。
- (3) 活用する手段は、幼児児童生徒が使っているよさを実感できるように、障害の種類や程度、興味・関心等に応じて、随時検討しながら選択する。
- (4) 一つのコミュニケーションの方法にこだわるのではなく、幼児児童生徒の発達の段階や興味・関心等に応じて、方法を変えたり、幾つかの方法を組み合わせたりする。
- (5) 相手に伝える内容を広げたり、深めたりするような指導を併せて行う。
- (6) 日常生活の中でも活用できるように、学校内で共通理解を図りながら取り組むとともに、家庭と連携しながら指導を行う。
- (7) 安全性や衛生面に配慮して機器の選択をする。

3 実践例

ここでは、知的障害があり、言葉でのコミュニケーションが難しい児童（特別支援学校小学部第5学年）の実践例について述べる。自立活動の時間における指導の学習を中心に、拡大代替コミュニケーションで、自分のしたいことを伝えることができるようになることで、生活が豊かになることを目標とした事例である。

(1) 児童の実態

<対人関係、コミュニケーション>

- ・ 興味・関心のあるマークや広告の文字などを教師に書くように要求する。
- ・ 欲しいものがあると教師の手を取って棚の中から取り出させるなどのクレーン行動で要求する。
- ・ 喃語なんごが中心である。
- ・ 要求がうまく伝わらないと頭を叩くなどの自傷行為があったり、大きな声を出したりすることがある。

<認知・操作>

- ・ 平仮名、片仮名に興味があり、教室に貼ってある文字盤の文字を指で示して、教師に読むことを要求する。
- ・ 簡単な指示理解はできる。
- ・ なぐり書きをすることはできるが、ペンの持ち方はぎこちなく、手指の操作は未熟である。
- ・ 動作模倣は苦手である。

(2) 目標

【自立活動の年間目標】

文字カードや文字盤などを使って、したいことを伝えることができる。

【自立活動の時間における指導の目標】

(1 学期)

文字入力・合成音声再生タイプの VOCA に自分で文字を入力することができる。

(2 学期)

使いたい機器を選んで、好きなキャラクターなどの名前を入力することができる。

(3 学期)

使いたい機器を選び、「〇〇ください」と文字を入力して、欲しい物を伝えることができる。

(3) 指導の経過（自立活動の時間における指導）

	活動内容	指導上の留意点	児童の様子
一学期	1 文字カードを選ぶ。 （平仮名、片仮名） 2 言葉遊びをする。 ・ 録音・再生／複数キータイプの VOCA での音声の再生 ・ 文字入力・合成音声再生タイプの VOCA への文字入力	・ 興味のあるキャラクターを使って言葉遊びをしながら、信頼関係を深める。 ・ 文字入力を間違っても、すぐに訂正せず、まずは VOCA を使う楽しさや伝わる喜びを味わわせる。	・ 録音・再生／複数キータイプの VOCA に好きなキャラクターなどの名前を教師が録音して再生すると、とても喜んだが、文字入力・合成音声再生タイプの VOCA を選んで使うことが多かった。 ・ 文字入力・合成音声再生タイプの VOCA には、とても興味を示し、自分で文字を入力して喜んでいて、濁音や拗音、促音の入力は難しかった。
二学期	1 文字カードを選ぶ。 （平仮名、片仮名） 2 使いたい機器を選び、文字入力して言葉遊びをする。 ・ 文字入力・合成音声再生タイプの VOCA ・ 玩具用コンピュータ ・ 携帯用ゲーム機	・ 正しい言葉で伝えられるように、カルタ取り遊びで文字指導を行う。 ・ 機器を文字カードで選んだら、機器の名前を言って伝わったことを知らせる。	・ 使いたい手段を文字カードを教師に渡し、選んで使うことができた。 ・ 操作がしやすい文字入力・合成音声再生タイプの VOCA を選ぶことが多く、絵本の絵や文字を見ながら自分の好きなキャラクターの名前を文字入力させた後、入力した言葉を再生させていた。再生させた言葉を教師がまねて言うと言っていた。
三学期	1 文字カードを選ぶ。 （平仮名、片仮名、漢字） 2 使いたい機器を選んで文字入力し、言葉遊びをしたり、欲しいもの伝えたりする。 ・ 文字入力・合成音声再生タイプの VOCA ・ 玩具用コンピュータ ・ 携帯用ゲーム機	・ 活動を終わるときには、「おわり」という文字を入力させ言葉の意味を理解しやすいようにする。 ・ 伝えたいことが伝わったことを知らせ、機器の便利さを味わわせながら、文字入力の指導を行う。	・ 使いたい機器や絵本を替えたいときには文字入力・合成音声再生タイプの VOCA に「おわり」と平仮名で入力して、気持ちを知らせるようになった。 ・ 文字入力・合成音声再生タイプの VOCA に絵本の名前を打ち込んで、使いたい絵本を伝えるようになった。 ・ 玩具用コンピュータや携帯用ゲーム機に興味を示していたが、操作がまだ難しかった。

(4) 成果

自立活動の時間に VOCA や携帯用ゲーム機などで文字入力の仕方を指導したり、伝わる喜びを味わわせるようにしていったりしたことで、学級でも文字盤を使って、自分がしたいことを単語で担任に知らせるようになってきた。また、家庭等で、したくない活動については、文字盤を使って、「おわり」と伝えるなど、学校以外でも意思や気持ちを伝えるようになってきた。

このような変化に伴い、頭を叩いたり、大きな声を出したりすることが減ってくるなど情緒も安定してきた。

コミュニケーションの指導は、将来の自立と

社会参加を目指して、生活を豊かにしていくことを目的として行うことが大切である。どのような場面で、どのような手段を使うことがよいのかなど、幼児児童生徒の実態把握を十分に行いながら、指導を進めることが望まれる。

－引用・参考文献－

- 1) 「特別支援教育におけるコミュニケーション支援」編集委員会『特別支援教育におけるコミュニケーション支援』平成17年、ジアース教育新社
- 2) 安東忠『こどものためのAAC入門』平成9年、協同医書出版社
- 金森克浩『特別支援教育におけるATを活用したコミュニケーション支援』平成22年、ジアース教育新社
- 全国知的障害養護学校校長会『コミュニケーション支援とバリアフリー』平成17年、ジアース教育新社

（特別支援教育研修課）